事後評価報告書

1. 基本情報

（１） 実行団体名：宮城県障がい者カヌー協会
（２） 実行団体事業名：カヌーを通じての共生社会、インクルーシブの実現
（３） 資金分配団体名：公益財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団（略称：Ｂ＆Ｇ財団）
（４） 資金分配団体事業名：障害児等の体験格差解消事業
（５） 事業の種類：草の根活動支援事業
（６） 実施期間：2020 年 4 月～2023 年 3 月
（７） 事業対象地域：宮城県全域

2. 事業概要

（１）事業によって解決を目指す社会課題と想定される直接対象グループ

障害児や児童養護施設

（２）事業の概要（中長期アウトカム・短期アウトカム・活動）

①中長期アウトカム

協会が環境整備することにより、障害児が「余暇」としてのカヌー、「競技」としてのカヌーを自らが選択し、自主的に個々の目標を持って、生涯スポーツとしてのカヌー活動に取り組むことが出来るようになる。また、障害児の保護者、関係団体などをはじめとする健常者もサポートを経験し、障害児や健常児など分け隔てなく、共に行うカヌー活動を通じて共生社会を達成する。

②短期アウトカム

1．障害児がカヌー体験会への継続的な参加、もしくは、カヌー競技へ参画することで、社会性や自立心などの向上が見え始める状態となる。

2．障害児の保護者が、子どもを積極的に、カヌー体験会への継続的な参加をさせる、もしくは競技に参画させる状態となる。

3．障害児支援施設や障害者支援団体等、特別支援学校のスタッフが、カヌー体験プログラムを団体の日常的な活動とする状態となる。

4．特別支援学校や障害者支援団体等で、カヌー体験に関する理解が深まるとともに、障害者団体だけではなく通常の学校や健常者のカヌー団体など新たな連携・協力・支援を行う団体等が増える状態となる。

5．当団体と連携協力団体（障害児等支援団体以外も含む）のコミュニケーションが深まることにより、実行団体同士や周辺の学校・団体等の連携が構築される。

③活動

・温水プールでのカヌー体験会の開催

・屋外でのカヌー体験会の開催

・スプリントカヌー競技の練習会の開催

・カヌー県民大会への出場

（3）出口戦略

①広報戦略：

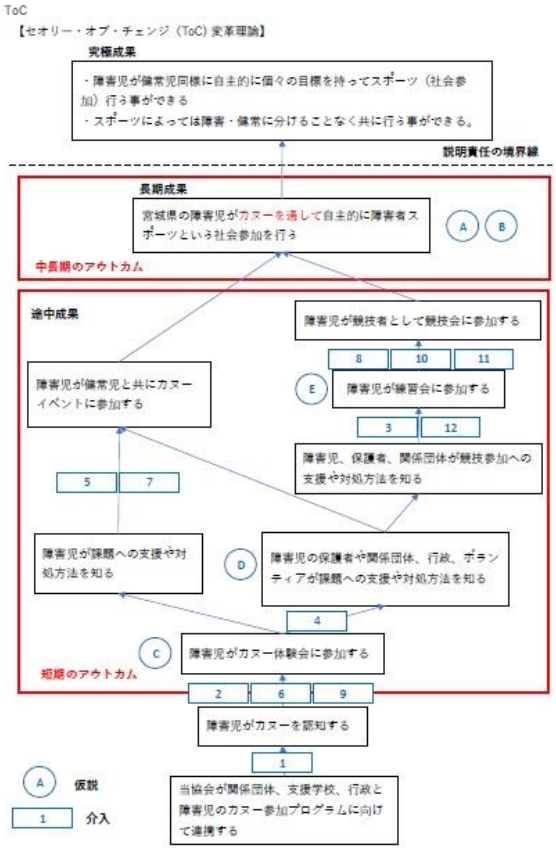
・現在行っている社協依頼の福祉授業を特別支援学校支援学区に提案していただき、屋外が無理でも学校のプールにて体験を PR する。

・日本障害者カヌー協会、B&G、加美町で行われた体験会後、カヌーに興味を持った障害児の受け皿となる。

②連携・対話戦略：

・福祉授業に関しては仙台市社会福祉協議会の福祉授業担当者と密に打ち合わせをしている。2019 年は福会長の我妻が個人的に B&G、日本障害者カヌー協会、加美町のイベント等でお手伝いさせていただいた。その中では宮城県でカヌー競技をしたい当事者も見られ、2020 年度から鳴瀬川カヌーレーシング場で練習する方もおられる。障害児も希望者が数名いるので、2020 年度からは各団体と個人ではなく、団体として連携していき、不可能な他の団体（実行に対しての細部のサポート）を当団体で行っていく戦略である

3.　事後評価実施概要実施概要



究極成果	・障害児が健常児同様に自主的に個々の目標を持ってスポーツ（社会参加）行う事ができる。 ・スポーツによっては障害・健常に分けることなく共に行う事ができる。

仮説	A：スポーツの中でもカヌーは障害・健常関係なく行う事ができる。 B：カヌーは健常児が気軽に楽しめるレベルから国内競技、国際競技へと自主的に選択することができる可能性がある。 C：障害児はカヌーをはじめるにあたり、意思に留まらずに、人的・資金的サポートの準備も必要である。 D：障害児は保護者・学校・支援団体・行政の理解と支援があればスポーツを行う事が可能となる。 E：障害児も健常児同様にスポーツクラブ、部活動、アスリートとして社会参加することが可能である。

介入	1.普及活動を行う 2.体験会を行う 3.練習会を行う 4.サポート講習会を行う 5.カヌーイベントを行う 6.自協会の体験会などのスケジュール表を作成する 7.別団体の体験会などのスケジュール表を作成する 8.競技会のスケジュール表を作成する 9.スケジュール表と実践的な学びの環境が整備される 10.選手登録のサポートをする 11.競技会参加のサポートをする 12.個人助成をあっせんし、手続きをサポートする

（1）実施概要

①どんな変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか

・知見の共有、活動の改善

・アウトカムの達成度

・波及効果

・事業の効率性

②どんな調査で測定したのか※調査概要の記載の仕方は末ページ記載例参照

評価基準：アンケート調査　測定方法：定量および定性　アンケート統計

評価基準：目標値との比較　測定方法：定量　参加者数の集計

評価基準：開催地の数　測定方法：開催地の集計

評価基準：外部組織による評価　測定方法：定量および訂正　外部評価調査

③結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか

・内部での評価で判断した結果を外部評価と照らし合わせて、統合性を図る一方、齟齬がある場合、経過と認識にどのような齟齬があったのかを部分単位で深堀して事業成果を判断する。

（２）実施体制（内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職）

①内部：評価及び報告書作成　我妻進之　宮城県障がい者カヌー協会　副会長
②外部：パラ競技を目指す障がい児に対する指導、助言および本事業の評価に係るアドバイス
本田　泉　公益社団法人日本カヌー連盟・パラカヌー強化委員会　副委員長

4.　事業の実績

４-１インプット（主要なものを記載）

（１）人材
内部：合計８人（①普及　５人　②競技　３人　ボランティア　のべ 20 人（年間））
外部：合計２人（日本障害者カヌー協会）

（２）資機材（主要なもの）
レジャー艇シングル・ダブル）、シーカヤック、パラ艇、平パドル、スプーンパドル、ライフジャケット

（３）経費実績　助成金の合計（2,585,000 円）
① 契約当初の計画金額 2,585,000 円
② 実際に投入した金額

（４）自己資金（521,000 円）
① 契約当初の自己資金の計画金額 521,000 円
② 実際に投入した自己資金の金額と種類　副会長のカヌー競技の活動資金の一部
③ 資金調達で工夫した点　活動資金の活用に関しての支援者への報告

４-２活動とアウトプットの実績

（１）主な活動
2020.9.26　カヌー体験会（ボランティア希望者、協力団体など）仙台市広瀬川
2020.10.4　インクルーシブカヌー体験会　加美町薬来プール
2021.2.24　インクルーシブカヌー体験会　仙台市広瀬運動公園プール
2021.10.9　サポーター研修　加美町カヌーレーシング場
2021.10.10　インクルーシブカヌー体験会　加美町薬来プール
2022.1.30　インクルーシブカヌー体験会　仙台市清水沼プール
2022.4.16　インクルーシブカヌー体験会　大河原町白石川
2022.5.3　競技カヌー練習会　仙台市貞山堀
2022.5.28　海ごみゼロフェスティバル in 加美町（協力）
2022.6.25　宮城県民体育大会カヌースプリント競技会　加美町カヌーレーシング場
2022.8.11　インクルーシブカヌー体験会　仙台市貞山堀

2022.8.21　200m 漕（日本障害者カヌー協会主催）参加　石川県木場潟
2022.9~ 東北大学漕艇部艇庫前貞山堀にて定期練習会　岩沼市
2022.11.6　インクルーシブカヌー体験会　加美町薬来プール
2022.12.11　インクルーシブカヌー体験会　宮城県障害者プール

（2）アウトプットの実績

【アウトプットに関する記載項目】

① アウトプット
② 指標
③ 初期値
④ 目標値
⑤ 目標達成時期（事業計画書に記載した時期）
⑥ 実績値

アウトプット	指標	初期値/初期状態	目標値/目標状態	目標達成時期	実績値
1．障害児が、カヌー体験を知って、参加する状態となる。	①カヌー体験に参加した対象となる子供の数 ②カヌー体験を見学した対象となる子供の数 ③カヌー体験に参加・見学した対象となる子供の満足度 ④カヌー体験に協力したサポーターの数	①地域全体で20人 ②地域全体で5人 ③満足度調査（ベースライン調査） ④地域全体で5人"	①地域全体で150人 ②地域全体で30人 ③満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する） ④地域全体で10人	①地域全体で150人 ②地域全体で30人 ③満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する） ④地域全体で10人	① 地域全体で120人 ② 地域全体で10人 ③ アンケートでリピート希望が8割、リピート数も 10人、競技者2人 ④ 地域全体で 30 人以上
2．障害児の保護者が、子どもを積極的に、カヌー体験プログラムに参加させる状態となる。	①カヌー体験を見学した保護者の数 ②カヌー体験を見学した保護者の満足度	①地域全体で30人 ②満足度調査（ベースライン調査）	①地域全体で150人(初期値から5倍) ②満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）	①②2023 年 2 月	① 地域全体で160人 ② アンケートでリピート希望が 9 割リピート数15人、競技帯同2人

３．障害児支援施設や障害者支援団体等、特別支援学校のスタッフが、カヌー体験プログラムを認知して参加する状態となる。	①カヌー体験を見学したスタッフの数 ②カヌー体験を見学したスタッフの満足度 ③障害児支援施設や障害者支援団体等への事業及び団体等の周知活動の数	①地域全体で5人 ②満足度調査（ベースライン調査） ③宮城県障害者スポーツ協会等 3 ヵ所程度に案内済み	①地域全体で20人 ②満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する） ③30 団体	①②2023 年 2 月 ③2021 年 9 月	① 地域全体で 10 人 ②聞き取りで満足度が高い ③事業認識の支援学校は増加（名取支援、岩沼支援、船岡支援学校）
４．特別支援学校や障害者支援団体等で、カヌー体験に関する認知することにより、障害者団体だけではなく通常の学校や健常者のカヌー団体など新たな連携・協力・支援を行う団体等が体験会に参加する状態となる。	①連携・協力・支援する学校・団体等の数 ②カヌー体験以外で連携・協力・支援する学校・団体等の数 ③カヌー体験を見学した学校・団体等の数	①地域全体で2事業者 ②地域全体で2事業者 ③地域全体で2事業者	①地域全体で5事業者 ②地域全体で5事業者 ③地域全体で5事業者	①②③2023 年 2 月	① 地域全体で 6 事業者 学校 3 ・団体 6 ②地域全体で 6 事業者 学校 2・団体 3 ③地域全体で 5 事業者 学校 1 ・団体 5
５．当団体と連携協力団体（障害児等支援団体以外も含む）から体験会等を通じて入会、ボランティア登録へとつながる状態となる。	①当団体と連携協力団体間のつながりの数 ②当団体と連携協力団体間のつながりの質	①青葉区社会福祉協議会職員、仙台市障害者福祉協会職員数名 ②個人的つながりのみ	①つながる連携協力団体の増加（初期値より増加） ②つながりの質の向上（団体間のつながりをもつ）	①②2023 年 2 月	① 宮城県障害者スポーツ協会、MOTTO（MOTTO から荒浜キッチンに繋がる） ② 団体間のつながりに変化
６．新型コロナウイルス感染症対策をすることに	器材、器具を準備することで三密対策等の安全対	新型コロナウイルス感染症の安全対策が	新型コロナウイルス感染症の十分な安全	2021 年 9 月	聴覚障害者が口の動きを見えるようにフェイスシールド、使い

よって、障害児、関係者が安全に事業に参加することが出来る状態となる。	策を講じた事業が実施できている状態。	不十分な状態。	対策を講じて事業を実施している状態。		捨ての鉛筆、車いすけん引器具による介助密の回避などの対策ができている。

4-3外部との連携の実績

①水辺の活動以外でも連携の機会を増やすことで、外部連携団体等との対話の回数を増やし、イベントの開催を実現できたことが成果に繋がった。

②イベントの告知は行政から各支援学級、支援学校にチラシを出す形をとったが、イベント自身が当事者の保護者間で口コミとなり、連絡が来るようになった。

③当協会は器材やサポートのノウハウはあったが、会場のプールや保護者会、ボランティアの確保は社協や県障害者スポーツ協会や各種団体が強みある協力を得ることができた。

5. アウトカムの分析

5−1. アウトカムの達成度

（1）短期アウトカムの計画と実績

【短期アウトカムに関する記載項目】

① 短期アウトカム
② 指標
③ 初期値／初期状態
④ 目標値／目標状態
⑤ 目標達成時期

短期アウトカム	指標	初期値/初期状態	目標値/目標状態	目標達成時期
1．障害児がカヌー体験会への継続的な参加、もしくは、カヌー競技へ参画することで、社会性や自立心などの向上が見え始める状態となる。	①カヌー体験（自然及びプール）に継続して参加を希望する障害児等の人数 ②体験からカヌーイベントへ参加した人数	①障害児がカヌー自体を知らない、もしくはカヌーの経験がない ②継続した練習や目標となる大会等	①初体験から加美町B＆G海洋センター等におけるカヌー関係イベント、日本障害者カヌー協会のパラマ	①2022年10月
2．障害児の保護者が、子どもを積極的に、カヌー体験会への継続的な参加をさせる、もしくは競技に参画させる状態となる。	①カヌー体験（自然及びプール）に継続して参加を希望する障害児等の保護者の人数 ②体験からカヌーイベントや競技カヌーへの参加人数	①障害児の親が障害がある子供も継続的にカヌー体験が出来ることを知らない	①初体験から加美町B＆G海洋センター等におけるカヌー関係イベント、日本障害者カヌー協会のパラマ	①2022年10月
3．障害児支援施設や障害者支援団体等、特別支援学校のスタッフが、カヌー体験プログラムを団体の日常的な活動とする状態となる。	①カヌー体験（自然及びプール）に継続して参加を希望する障害児支援施設や障害者支援団体等、特別支援学校のスタッフの人数	①カヌーは外でするもので学校のプール等で体験できる認識はない、また、障害者がカヌーを体験できる	①障害児支援施設や障害者支援団体等、特別支援学校のスタッフが、サポート講習会等への参加、活動にボ	①2022年10月
4．特別支援学校学校や障害者支援団体等で、カヌー体験に関する理解が深まるとともに、障害者団体だけではなく通常の学校や健常者のカヌー団体など新たな連携・協力・支援を	①特別支援学校での福祉授業としてのカヌー体験の実施回数 ②障害者支援団体イベントでの啓発件数	①障害者支援団体依頼の健常児向けの福祉授業はあるが、障害当事者向けの福祉授業はない	①県内25校ある特別支援学校から年間3校で、学校のプールを使用したカヌー体験会の実施（3回）	①2022年10月
5．当団体と連携協力団体（障害児等支援団体以外も含む）のコミュニケーションが深まることにより、実行団体同士や周辺の学校・団体等の連携が構築される。	①実行団体間や連携協力団体と定期的なコミュニケーションがある団体の数 ②地域の連携協力団体等と協議する会議等の回数	①2団体 ②年1回 ③全実行団体でで年1回の会議開催	①5団体 ②年2回 ③全実行団体で年2回以上の開催	①2022年10月
▼▼▼（対象地域）において、○○（資金的アウトプット）により、□□（対象グループ）が◎◎◎（短期アウトカム）された状態になる。				

コピー

⑥ アウトカム発現状況（実績）

短期アウトカム	指標	目標値	アウトカム発現状況（実績）
１．障害児がカヌー体験会への継続的な参加、もしくは、カヌー競技へ参画することで、社会性や自立心などの向上が見え始める状態となる。	①カヌー体験（自然及びプール）に継続して参加を希望する障害児等の人数 ②体験からカヌーイベントへ参加した人数 ③社会性の育成や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	①初体験から加美町 B＆G 海洋センター等におけるカヌー関係イベント、日本障害者カヌー協会のパラマウントチャレンジ（体験会）への参加（5 名） ②練習会への参加と毎年 6 月に行われる宮城県県民体育大会（競技）レースに参加（3 名） ③参加した子供に対しての直接観察による意識・行動の把握（継続時）	①身体障害児 2 名、知的・発達障害児 10 名 ②練習会：身体障害児 2 名、知的・発達障害児 1 名 競技：身体障害児 2 名 ③月 2～3 回、水上及び陸上練習：身体障害児 2 名
２．障害児の保護者が、子どもを積極的に、カヌー体験会への継続的な参加をさせる、もしくは競技に参画させる状態となる。	①カヌー体験（自然及びプール）に継続して参加を希望する障害児等の保護者の人数 ②体験からカヌーイベントや競技カヌーへの参加人数	①初体験から加美町 B＆G 海洋センター等におけるカヌー関係イベント、日本障害者カヌー協会のパラマウントチャレンジ（体験会）への保護者の参加（7 名） ②練習会への参加と引率として毎年 6 月に行われる宮城県県民体育大会（競技）レースへの参加（5 名）	①身体障害児保護者 2 名、知的・発達障害児保護者 15 名 ②練習会：身体障害児保護者 2 名、知的・発達障害児保護者 1 名 競技帯同：身体障害児保護者 2 名
３．障害児支援施設や障害者支援団体等、特別支援学校のスタッフが、カヌー体験プログラムを団体の日常的な活動とする状態となる。	①カヌー体験（自然及びプール）に継続して参加を希望する障害児支援施設や障害者支援団体等、特別支援学校のスタッフの人数 ②施設等のスタッフから見た子供の社会性の育成	①障害児支援施設や障害者支援団体等、特別支援学校のスタッフが、サポート講習会等への参加、活動にボランティアとしての参加（10 名） ②関係者インタビューまたはアンケート等による意識	①支援施設 8 名、支援学校 2 名

	や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	調査	②事業完了前の聴き取りでほぼ全員の事業終了後の参加意思を確認。仙台運送様は事業中は労働組合の有志による協力だったが、会社としての協力で事業終了後は協力の打診がある。
４．特別支援学校学校や障害者支援団体等で、カヌー体験に関する理解が深まるとともに、障害者団体だけではなく通常の学校や健常者のカヌー団体など新たな連携・協力・支援を行う団体等が増える状態となる。	①特別支援学校での福祉授業としてのカヌー体験の実施回数 ②障害者支援団体イベントでの啓発件数	①県内 25 校ある特別支援学校から年間 3 校で、学校のプールを使用したカヌー体験会の実施（3 回） ②県内での福祉関係イベント（福祉まつり等）における啓発回数（5 回）	①コロナによって外部への開放は 0 回だが、チラシの配布は参加者からのアンケートで把握。 ②コロナでイベント中止が相次ぎ 2022 ウェルフェアまつり 1 回のみ
５．当団体と連携協力団体（障害児等支援団体以外も含む）のコミュニケーションが深まることにより、実行団体同士や周辺の学校・団体等の連携が構築される。	①実行団体間や連携協力団体と定期的なコミュニケーションがある団体の数 ②地域の連携協力団体等と協議する会議等の回数 ③実行団体間の事例等を共有する会議等の回数	①5 団体 ②年 2 回 ③全実行団体で年 2 回以上の開催	①宮城県、仙台市、宮城県障害者スポーツ協会、仙台市社会福祉協議会、仙台市障害者福祉協会、手をつなぐ育成会、仙台運送、一般社団法人 MOTTO、荒浜キッチン ②宮城県障害者スポーツ協会との会議年 2 回 ③2020 年 2 回 2021 年 2 回 2022 年 6 回

⑦ 事前評価時の短期アウトカム（変更した場合は元の短期アウトカムを記載ください）

短期アウトカム
１．障害児がカヌー体験会への継続的な参加、もしくは、カヌー競技へ参画することで、社会性や自立心などの向上が見え始める状態となる。
２．障害児の保護者が、子どもを積極的に、カヌー体験会への継続的な参加をさせる、もしくは競技に参画させる状態となる。
３．障害児支援施設や障害者支援団体等、特別支援学校のスタッフが、カヌー体験プログラムを団体の日常的な活動とする状態となる。
４．特別支援学校学校や障害者支援団体等で、カヌー体験に関する理解が深まるとともに、障害者団体だけではなく通常の学校や健常者のカヌー団体など新たな連携・協力・支援を行う団体等が増える状態となる。
５．当団体と連携協力団体（障害児等支援団体以外も含む）のコミュニケーションが深まることにより、実行団体同士や周辺の学校・団体等の連携が構築される。

（２）アウトカム達成度についての評価

当時者、保護者とも参加数は開始当初 0 名からなので、当時者 120 名、保護者 150 名の参加は達成度としては高い。リピート率も両者とも 1 割ほどおり、同様に評価している。障害児が体験会を通じてカヌー競技へと移行し、社会性や自立心などを向上しているかは、2 名の当事者が練習会を通じて県民大会へと参加し現在も練習を継続し令和 5 年度の目標レースを持てた。しかし、知的・発達障害の当事者に関しては希望の声は聞くが、移行者はいないため、概ね達成できたと評価した。支援団体や支援行政が拡大し、また障害児保護者団体の評価が向上に関しては、リピート率もあるが、福祉関連の団体だけではなく、民間の企業からイベントでの運搬などの提供や人員の提供（仙台運送様）の実例や、公立のプールでのカヌー体験会は前例がなく借りる事が難しかったが、実績を通じて仙台市公立 1 箇所、宮城県 1 箇所で開催出来た事は向上したと評価している。しかし、特別支援学校、支援学級に関しては直接的な実績は得られていないので、今後の課題とした。単独で事業実施する状態から、多様な関係者、支援者の巻きこみにより円滑な事業実施ができるようになる事に関しては体験会、練習会とも活動場所が増え、ボランティアの募集に苦労しなかった事から達成度は高い。

5－2. 波及効果（想定外、波及的・副次的効果）

想定外の効果といえば当事者に関わる福祉系の団体とのつながりは想定できたが、震災遺構の利用団体や東北大学の漕艇部と繋がれたのは活動の水辺で別の活動をしている組織とつながれたことでした。今回の事業以降も関係は継続していく効果はこの事業のおかげだと思われる。

5－3. 事業の効率性　※JANPIA 提供補足資料参照

カヌーは備品、環境という資源の確保が難しい事もあり、健常児であっても敷居が高い。当協会が本事業で備品を持ち活動場所を開拓出来たことは効率性の向上につながったと思われる。

６．成功要因・課題

３年間の休眠預金事業によって、カヌー体験会が障がい当事者の保護者に口コミで浸透したこと、また、当初は予定していなかった様々な組織、団体と連携が出来た事が最大の成果だと考える。
当初は、限られた水面、数少ない温水プールでの活動から始め、当初計画でも特別支援学校との連携により、一律に、大勢への機会提供を行うことを目指していた。
しかし、コロナ禍により環境が一変し学校への受け入れが出来なくなった時に、次の方向性として、障害者支援団体、当事者団体と連携し、少人数でも小回りの利く形で、仙台市内に点在する温水プールでの事業実施に切り替えた。これが功を奏し、安全、安心、自宅から直接保護者と一緒に現地に行く事ができるという面で、特に保護者からの評価に繋がったものと考える。
また、本会活動では、障がい児だからエントリーレベルまでで終わらせる、我慢させるというような考えはなく、挑戦を望む子どもには、競技用のカヌー艇にも早いうちに挑戦させる。これはスタッフの協力の賜物であるが、こういった環境を整えることが、障がい児にも挑戦する意欲を与え、実際に調整し、段階的に達成感を得ることで、自己肯定感や挑戦する気持ちを醸成することができたのだと考えている。
一方で、前述の通り、コロナ禍によって特別支援学校との組織的連携に至らなかったのは課題である。コロナ禍が収束し、外部人材の受け入れが再開され次第、連携の相談を再開したい。

７．その他深掘り検証項目（任意）

今回の事業で有益、重要と思われる事は当初、障害児の体験格差で協力して頂けるのは福祉関連や行政という認識が強かったが、実際関係が深まったのはそのエリアで福祉以外の活動されている組織、団体とのつながりが大きかったと思われる。今後にも関係することだが、活動環境を拡大していく上で、近隣でどのような活動をしているのかを知る必要性が高い。

８．結論

８-１事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（1）事業実施プロセス				○	
（2）事業成果の達成度				○	

（1）、（2）それぞれ１箇所を選択する。

８-２事業実施の妥当性

カヌー体験の機会の格差は計画段階で想定されていた。アンケートでの自由記入も多く、リピーターも多かった結果は達成度で高く評価できると思われる。具体的、客観的記載では宮城県手をつなぐ育成会さんの会報「それいけ!! みやぎっこ」2021.8.20　第 27 号に掲載された当協会の体験会の記事での【参加者の感想】に「子どもに色々なことを体験させたいと思っていても障害があり、ましてや重度だったりするとなかなか機会に恵まれません。親の力だけでは難しい活動でも、支援してくださる 環境であれば思い切ってチャレンジすることもできます。 今はコロナ禍で定期的な開催も難しいところだと思われますが、もっと暖かくなったらぜひ川での体験会にも参加したいと思っております。」（早川亜矢子）と書かれた内容は事業計画のアウトカムに沿ったもので、事業実施の妥当性を評価していただけたものと思われる。

同様の評価は公益社団法人日本カヌー連盟　パラカヌー競技委員会　副委員長の本田氏の報告書の「効果を発揮するにあたり実効があったものとしては、計画のうちの事業実施の意義にも示されている通り、障がい児は健常児に比べ水辺のスポーツの体験の機会が少ないが、（潜在的にもしくは機会を提供することにより体験を希望する障がい児・保護者のニーズが高いため、本事業により必要機材を整備することにより、数多くの機会を安全に提供することができるという意義を叶えるものになっていたということである。

事業設計の中で策定されている協会（宮城県障がい者カヌー協会）が環境整備をすることで余暇のカヌー・競技のカヌーを各々選択し、自主的に興味や目標を持って生涯スポーツとしてカヌーを選択することができるようにすること、また、サポートを通じて障がい児・健常児が分け隔てなく共にカヌーを通じて共生社会を達成するという中・長期のアウトカムを叶えるための第一歩としての活動は既に始まってきていた。屋内プールを使ったカヌー体験会の実施や、宮城県障がい者カヌー協会がその存在を地域の日本障害者カヌー協会関連団体や組織・施設・個人に広報してきたことがそれにあたる。今回は短期のアウトカムとして本事業に計画されている障がい児の継続したカヌー体験会への参加、保護者の継続した協力に基づく体験会への参加及び競技としてのカヌー（パラカヌー競技）への参画、関係団体とのコミュニケーションが深まることによる

連携体制の構築についての実践の機会であったと考えるが、これらは深耕され、着実に進歩しているように見られた。」と評価していただいたことでも確認でき、今後の活動への自信にもつながった。また、当初苦戦すると思われた競技への児童を発掘、県民大会への参加や令和５年度の全国大会への目標を置いた練習会は本事業の継続性へとつながっていると思われる。

９．提言

本事業を持続、発展させるために当初考えた戦略は資材と環境を確保するという課題にして活動した。本事業に必要な備品は高額なものが多く、ニーズがある当事者、その保護者、協力したいと思っている人がいても資材がなければ何も出来ない。

次に環境で、安全性や利便性を考慮しなければ支援が必要な方の体験にはつながらない。この２点を事業中に確保出来たということは今後休眠預金に依存しなくても自走化が可能になり、環境の新規開拓も出来、今後の持続発展につながる。

１０．知見・教訓

水辺の体験は用具、場所の物理要因から健常児でも体験に格差があるのだが、障害当事者はそこに障害があるため、なお格差がある。障害は「機能の障害」と「障壁」が絡み合ってできるものなのであるが、機能の障害に関しては大枠で身体障害、知的障害、などは認識されてはいても細かい認識はされていない。精神障害を重複する２次障害に関してはなおさらである。障壁も事物、制度、慣行、観念の４つの障壁があるのだが、バリアフリーといえば事物が多く認識されて、他の３つの意識は低い。知的・発達障害はこの３つの障壁が多く、障害当事者の保護者は健常児の混ざった体験会では参加出来ないため諦めるといった保護者自身にも格差がある。今回の事業においても事物の障壁より他の障壁を排除することが多く、そこを重点化したことが達成度に比例した。３障壁は目で見えるものではないので、支援者側も認識していない事が多い。

今後の活動においても、４つの障壁をしっかりと念頭において事業を計画･運営していきたい。

１１．資料（別添）

（１）宮城県障がい者カヌー協会　休眠預金活用事業の外部調査について・中間報告（アドバイザー　本田泉氏）

（２）宮城県手をつなぐ育成会「それいけ!!みやぎっこ 27 号」取材、参加者感想の紹介

以上

休眠預金活用事業　外部調査について（中間報告）

令和 4 年 8 月 15 日
本田泉

事業名　カヌーを通じての共生社会、インクルーシブの実践
実行団体　宮城県障がい者カヌー協会
事業の種類　①　草の根活動支援事業

事業名　障害児の体験格差解消事業
資金分配団体　公益財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団

事業調査実施日　令和 4 年 8 月 10 日（水）・11 日（木）
事業調査概要　8 月 10 日
　事業の内容の確認・評価内容の確認、11 日の行事打合せなどを公益財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団のプログラムオフィサーである持田雅誠氏を交えて副会長の我妻進之氏と行った。
8 月 11 日
　協会が協力団体として実質的な事業運営に参画した「インクルーシブカヌー体験 in 貞山運河」のカヌー体験の補助及び参加者からの意見聴取を行った。

調査報告　事業実施にあたっての諸課題として、日常生活や成長に困難を抱える子どもの支援及び同様な困難を抱える子どもと若者の育成支援とともに、社会的孤立や差別の解消に向けた支援の必要性があると捉えて計画されており、この解決の一助としてのカヌー体験の機会を与えることや継続してカヌーに取り組む子供達・若者たちを支援することでの課題解決を図るという目的は適切であり、事業の支援に大きく値する事業であると考える。
　私も本事業（休眠預金活用事業）による支援が始まる以前に屋内プールを借用しての障がい者対象のカヌー体験会に参加したことがある。実行団体である宮城県障がい者カヌー協会はその目的として障がい者カヌーを通じて障がい者スポーツを普及・技術の向上を図るとともに、健常・障がいの障壁をなくした共生社会やインクルーシブ教育を目指すことを規約に定めており、今回お手伝いをしつつ視察したカヌー体験のイベントでは、本事業での補助により格段に参加者数及び参加（協力）団体数も増え、事業の効果が表れていると感じた。
　この効果を発揮するにあたり実効があったものとしては、計画のうちの事業実施の意義にも示されている通り、障がい児は健常児に比べ水辺のスポーツの体験の機会が少ないが、（潜在的にもしくは機会を提供すること

により体験を希望する障がい児・保護者のニーズが高いため、本事業により必要機材を整備することにより、数多くの機会を安全に提供することができるという意義を叶えるものになっていたということである。

事業設計の中で策定されている協会（宮城県障がい者カヌー協会）が環境整備をすることで余暇のカヌー・競技のカヌーを各々選択し、自主的に興味や目標を持って生涯スポーツとしてカヌーを選択することができるようにすること、また、サポートを通じて障がい児・健常児が分け隔てなく共にカヌーを通じて共生社会を達成するという中・長期のアウトカムを叶えるための第一歩としての活動は既に始まってきていた。屋内プールを使ったカヌー体験会の実施や、宮城県障がい者カヌー協会がその存在を地域の日本障害者カヌー協会関連団体や組織・施設・個人に広報してきたことがそれにあたる。今回は短期のアウトカムとして本事業に計画されている障がい児の継続したカヌー体験会への参加、保護者の継続した協力に基づく体験会への参加及び競技としてのカヌー（パラカヌー競技）への参画、関係団体とのコミュニケーションが深まることによる連携体制の構築についての実践の機会であったと考えるが、これらは深耕され、着実に進歩しているように見られた。

その理由としては、以前のイベントと比して参加した障がい児・障害を持った若者を中心とした体験会参加者が 50 名ほどと格段に増えたこと。また、障がい児・障害を持った若者の皆さんを引率してきてくださった父母や関係者の方々も一緒にカヌーに乗って水上で漕ぐ機会を提供することができたことがある。障がいの有無にかかわらずカヌーに乗って水面とほぼ同じ高さの目線でいつもは見下ろしている川から河岸や橋・空を見上げることは日常的には無いことであり、初めて乗ったカヌーがまっすぐ進まないなどのことも皆同様である。自らパドルを持つことが叶わないかたについては 2 人乗りのカヌーなどで我々やお父さん・お母さんが漕ぐカヌーに乗っていただいたが、今回初めて体験してくださった方々からは「楽しかった」「難しいこともあったが興味が湧いた」「この機会を知ることができたことがよかった」「来てよかった」「また案内してほしい」などの声を聴取することができたことからも効果があったことがわかると考える。この雰囲気を作ることができたのは使用する艇や装具などの数が増えたことが大きく起因したと考える。

また、以前実施された体験会以降、競技としてのカヌーを目指して練習を始めた 2 名の小学生を久しぶりに見たが、個々の障がいによるハンデを克服するための技量も少しずつ向上しており、パラカヌーの全国大会出場選手の高齢化と照らし合わせても、今後の我が国の有望選手として練習を効果的に継続してほしいと思われた。2 名とも競技としてのカヌーはとても楽しく継続できていてより早く漕ぐことができるようになりたいと答

えてくれた。また、それぞれの保護者の方々からもカヌーを始める前から継続している水泳も続けたいが、新しく始める機会を得たカヌーに対しては一層の興味と意識を高めているので家族としても応援を続けたいとの声を聞くことができた。

併せて、今回は特定非営利活動法人仙台バリアフリーツアーセンター・めぐみの寺子屋 with 七ヶ浜・障害者福祉施設ニシカツヤマ・ベースなどの団体の皆様など新たに今回のイベントから参画してくださった組織もあった。このような協力団体の増加は協会の広報活動の結果ということだけでなく、協会の活動が健全であると認知されていることの現れであると思われ、多くの障がい児・障がい者のかたを引率しつつイベントに協力していただくことができたことは事業の効果の現れであるとともに今後の広がりを実感できた事柄であった。

今回の調査で見聞きすることができたことの概略は以上であるが、今後はアウトプットの中に関連する団体として挙げた特別支援学校との連携などの推進を期待するが、アウトプットの評価の指標の中に挙げられた体験に参加した子どもの数、満足度、サポートした協力者の数ともに目標値を上回るものであったことはこう評価すべきであると考える。

イベント紹介

インクルーシブカヌー体験会

【 インクルーシブカヌー体験会とは？ 】

B&G 財団による休眠預金事業からの助成で市町村や関係団体が協力し実施している事業の１つです。

この事業は「活動環境を整備し障がい児が『余暇』または『競技』としてのカヌーを自ら選択し、目標を持って生涯スポーツとして取り組むことができる社会」また「保護者やサポーターなど関係する健常者も障がいの有無に関わらず、共に行うカヌー活動を通して共生する社会」、それらの実現を目指して行われています。

宮城県障がい者カヌー協会副会長 我妻（わがつま） 進之（のぶゆき） 氏に直接お話をお伺いしました

＜ 我妻（わがつま）氏と介助犬 グレープ ＞

「宮城県障がい者カヌー協会」の始まり ～ 現在の活動まで

2019 年日本カヌー協会に宮城県が加盟し、「宮城県障がい者カヌー協会」が発足しました。その背景には、個人で活動してきた我妻氏の経験が生かされています。

我妻氏は 45 歳の時に下肢障害を負われました。その時、社会につながるきっかけとなったのが学生時代に経験した部活動で、その中のひとつがカヌーだったのだそうです。その後は個人で活動を行ってきましたが、活動のための膨大な事務作業もひとりで行い、練習との両立は非常に大変なものでした。その時、次世代の子どもたちにはそういった負担を掛けず、障がい者カヌーに集中して取り組んでほしいとの強い思いを抱き、多くの方の協力を得て協会の発足に至ったのです。

「宮城県障がい者カヌー協会」では、今回紹介している体験会の提供から、余暇活動としての体験、そしてパラアスリート等育成までの一貫した流れを持っているため、希望や状況に合わせた活動・支援が受けられます。

「カヌーは非常に間口の広い競技である」と我妻氏は教えて下さいました。他の競技のように始めるときからルールの理解や技などの習得は必要なく、まずはカヌーに「乗る」ことで始められるからです。そう考えると非常にチャレンジしやすいスポーツなのではないでしょうか。

我妻氏から「面倒な手続きは協会が行います。ぜひどんどんチャレンジして欲しい」との心強いメッセージをいただきました。

体験会は、障害の程度に関わらず活動できるよう考えられています。興味のある方、迷っている方、まずは体験会へ参加してみてはいかがでしょうか？

写真：体験会の様子、スタッフ（黒いユニフォーム）の充実ぶりが伺えます。

【　参加者の感想　】

昨年 10 月加美町のやくらいウォーターパークで開催された体験会に初めて参加しました。会場で待ってくれているスタッフさんの多さ、用意されているカヌーの数に驚きました。活動が始まると、子どもたちは誰一人手持ち無沙汰になる瞬間がなく、希望するだけ何度もカヌーに乗せてもらうことができました。後半には引っ張り合いのミニゲームもあり大勢が楽しく参加しましたが、ひとりで自由に楽しみたい息子にもスタッフさんが付いてくれました。

今年２月の仙台市広瀬総合運動場プールでの体験会にも参加し、スペースの都合上多少順番待ちがありましたが、それでも癇癪（かんしゃく）などを起こすお子さんもなく和やかに活動が進められました。１人乗りや２人乗りの大きさの異なる色々なカヌーに、救命胴衣を着けた子ども達が何度も乗って楽しんでいる姿を、親達は嬉しそうにスマホ等で写真や動画を残していました。

子どもに色々なことを体験させたいと思っていても障害があり、ましてや重度だったりするとなかなか機会に恵まれません。親の力だけでは難しい活動でも、支援してくださる環境であれば思い切ってチャレンジすることもできます。今はコロナ禍で定期的な開催も難しいところだと思われますが、もっと暖かくなったらぜひ川での体験会にも参加したいと思っております。（早川亜矢子）

【お問い合せ】
〒980-0803　宮城県仙台市国分町 3-8-14　株式会社 サンテック 気付
TEL080-4166-2576　FAX022-722-8595

行 事 報 告

2021 年2月１９日（金）
宮城県障害者福祉センター
（参加者：６名）

フラワーアレンジメントと盆点前

2021 年2月１９日（金）宮城県障害者福祉センターで「フラワーアレンジと盆点前（ぼんてまえ）」を開催しました。

抹茶を点てる一連の所作のことを「点前（てまえ）」といいますが、今回の「盆点前」はお盆の上だけで点前を進めることをいい、気軽に楽しくテーブルとイスで体験しました。日頃から頑張っている自分への癒しの時間となりました。

三浦ひとみ先生をお迎えしてのお茶席は、テーブルとイスでリラックスして…しかも、ソーシャルディスタンスを取りやすい形式でした。

フラワーアレンジメントは、ペットボトルを利用して、オリジナルの花器に仕立て大切に１本ずつ選び、花と向き合いました。その後の盆点前も素敵なお茶碗、敷物を各自で選びました。お茶席に欠かせない上生菓子は、とても美しく味わい深く、初めて自分で立てたお抹茶の美味しいこと。自分の為に茶筅でシャカシャカお茶を立てる、ご褒美時間になりました。準備、協力を頂いたセンターの皆様に感謝して、お花をお土産に持ち帰りました。

（橋本武美さん）

１人ずつ、自分の気に入った花を選びいけ、お披露目会✿

無心になって
シャカシャカ体験

上生菓子と自分のたてたお茶
心豊かな時間を過ごしました